

第3回入学式創立者講演「創造的人間たれ」を読む

杉山 由紀男

1. はじめに

本日はようこそ創価大学へ、また講演会においでいただきました。当センターの一員として心から御礼申し上げます。この度の当センターの講演会は、「建学の精神を学ぶ」をテーマに、三回連続で行う予定でございます。本学のいわば原点である建学の精神を皆で学び、共有しあって、その精神に適う大学を建設していこう、そういう主旨で開催させて頂いたものでございます。また、そうすることが大学を支えてくださっている全ての方々へ報いる道でもあると、このように考えます。したがって、私は一応本日の講師ということになっておりますけれども、あくまで共に学ぶ一員として、そういう立場で、お互いの今後の一層の勉強のためのいわば参考資料、たたき台としてお話をさせていただきたいと思っています。ですから、本来であれば、創立者の講演の内容について皆さんにお聞きしたり、あるいは皆さんに問い掛けたりして共に学び合っていく形を取りたいと思いますが、今日は時間の関係で私のほうから一方的にお話していく形になりますことをお許しいただきます。なお、本日は学生の皆さんだけでなく、地域の方々、また遠方からわざわざおいでいただいた方もいらっしゃいます。本日のテーマ「創造的人間たれ」は、まずもって、私たち創大生が学ぶべき、目指すべき課題であります。しかしこれは何も創大生の専売特許というわけではありませんので、やはり、ここにいらしていただいた皆様をはじめ、私たち皆が目指すべき目標として、そういう普遍性を持ったテーマとして学んでいきたいと思っています。いま、創立者の第3回入学式での講演の模様を含むビデオを見ていただきましたが、私も改めて拝見してジーンとくるものがございました。創立者がどんな思いで創価大学を建てたのか、しばらくこれに思いを馳せました。今日はこの第3回入学式での創立者の記念講演を主な教材として、『「創造的人間たれ」を読む』と題してお話をさせていただきます。

まずこの講演を私なりに読ませていただきますと、創価大学開学の趣旨を「建学の三精神」、とりわけ二番目の「新しき大文化建設の揺籃たれ」に即して明らかにし、この趣旨に適う大学の学生は「創造的人間たれ」と、このように呼びかけられたものだと考えます。したがって、この講演には大きく分けて二つの柱があると思います。一つは、なぜ創価大学を建てたのか、開学の趣旨を明らかにする。もう一点は、特に学生に対して、「創造的人間たれ」と呼びかけられている、この二つです。そこでまず、創価大学を創立者がなぜ創立されたのか、その趣旨は「人間教育の最高学府たれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」「人類の平和を守るフォートレスたれ」の建学の三精神のうちに凝縮されておりますが、今日ここでのお話は、この創価大学開学の趣旨を、特に二番目の「新しき大文化建設の揺籃たれ」、これがどういう意味内容をもつものなのかを考察する中で、しっかりとおさえ、後半は、「創造的人間」とは一体どのような人間なのだろうか、これを一緒に考えていきたいと思っています。

2. 記念講演の背景

最初に、創立者講演の冒頭の二段落を読みます。「創価大学に入学した皆さん、本当におめでとうございます。ともに、この二年間、創価大学の草創に全魂を打ち込んでくださった大学当局の方々、教師の先生方、職員の皆様、そして学生の皆さん方、更にはそれを暖かく見守り、育んでくださった父兄ならびに関係者の方々、本当にご苦勞様でございました。私は、創立者として、皆様に心より御礼申し上げる次第であります。」(p. 47) まず創立者はこう話を始められています。私はこの講演全体、そして最初のこの5行を、創立者がどういう思いで話されたのだろうかと思いをはせるものです。といいますのは、昭和46年に創価大学は開学いたしました。しかし創立者は開学式、第1回入学式、第2回入学式には出席をされていません。その後学生主催の行事には招待を受けて出席されていますが、この第3回入学式が、大学として公式行事に初めて創立者を迎えた時でありまして、また、初めての記念講演です。

どうして、第1回、第2回の入学式に創立者はお見えにならなかったんだろうというのが、4期生として創価大学に入ったときの私の疑問でした。その後、先輩方から、開学当時の状況を色々うかがいました。また、今日まで様々な先輩の教員の先生や、あるいは職員の方々から当時の状況をうかがいました。ここであまり詳しく申し上げる時間はないのですが、当時、特に立派な先生方がいらっしやったのですけれども、教員の一部に、創立者は大学の建物を建てて、お金を出せばいいと、大学の運営や教育のことにあまり口を出さないでもらいたい、このように考える、そういう態度を取るような教員が何人かいたということを伺いました。また、『創立者の語らい』に、開学以前の創価学会の会合でのお話として、創価大学は「無名の教授と無名の学者とによってつくられていく」(p. 28)とあります。そして「創価大学は、まずそうした人々によって中核を固め、あとはテーマに応じて広く内外の一流の学者、創価大学設立の精神に賛同する人々にも、希望に応じてどしどし教壇にたっていただくことも考えております。私も、勉強させていただきたいと思っておりますし、もし、大学当局よりお許しをいただければ、文学論の講義をさせていただきたいと思っております(拍手)。だが、だめでしょう(笑)」(pp. 28-29)と語られています。すなわち、創立者は、いわゆる大学の教員だけでなく、広く建学の精神に賛同する方々に教壇に立ってもらうなど、いろいろな形で学生の教育を応援していただこうと、こういう考えを持たれていたようです。しかし、やはり当時の教員の中には、なにか大学の教員以外の人が教壇に立ったり、あるいは他の形で関わるということをよろしく思わない、何か自分たちの特権が侵されるとでも思ったのでしょうか、この創立者の考えについても反対する人が少なからずいたようで、創立者のこの構想は直ぐには実現いたしませんでした。現在は、「トップが語る現代経営」とか、いろんな形でそういう場が持たれておりますし、また創立者自ら今年(2003年)の春、特別文化講座を開いていただきましたけれども、当時はそのような状況であったわけです。ですから、創立者はせつかくご自分が大学を創立したのに、その大学は創立者を創立者として最大の敬意をもって迎える一致した体勢を取れない、そういう状況だったということになります。

創価大学は「無名の教員と無名の学者で」と創立者はおっしゃいましたけれども、実際の創価大学は有名な教授・有名な学者と無名の学生でスタートいたしました。他大学からいらしていただいた大変に有名な教授がそろっておりました。今もそういう有名な教授の先生方もおられますけれども、我々のように無名の教員と学生で創価大学を創っていく、そういう時代になりました。その意味で、これからがいよいよ創価大学の本格的な時代を迎えるんだという自負と決意で頑張ろうと思っておりますが、実際、当時私が学生として入学したときの印象でも、

立派な先生方もいらっしゃいましたけれども、やはり中には、なんというんでしょうか、申し訳ありませんけれども、教育への情熱にはちょっと一段落つけたのかなあと感ぜざるを得ない、こういう先生方もいらっしゃったように思います。創価大学が出来る前、1960年代から70年代にかけて、いわば世界同時多発学生運動といってもいいような、大変なヤングパワーが盛り上がった時代がありました。既存の文化とか政治体制、権力、そういうものに対する異議申し立て運動ですね、そういうものが盛んにありました。その中で、大学の教員も相当疲れ果てていた部分もあって、静かに学問したいと、そう思っていた教員も多かったのだと思います。

こうして、創立者が開学式や入学式に来られなかったのは、大学の運営は大学当局や学生の責任ですべてしっかりやってほしいという創立者ご自身の思いからの部分もあったとは思いますが、学生主催の行事には求めに応じて何度も出席をされていることなどを考え合わせると、やはり全学一致して創立者を創立者として迎えることのできない大学の、特に教員の状況の中に、その最大の原因があったと思わざるを得ません。

このような状況の中で、学生たちの中には、創立者を学生主催の行事だけでなく、大学の行事、なかんずく、入学式に何としてもお迎えしたいとの強い熱意が生まれました。1期生、2期生の先輩から当時のその熱い思いを聞いたことがあります。このような学生の熱誠に応え、また、開学から3年目を迎え、創立者はなにか時を感じられて、創価大学が新しい大学であるとはどういうことなのか、創価大学はどういう大学を目指すのか、創価大学の本質はなにか、創価大学を創立したのは一体何故なのか、いよいよ言うべきことは言わなければならない、やるべきことはやらなければならない、このように感じられて、この第3回入学式に臨まれたのではないかと、そのように推察します。こうしてはじめて記念講演をされたのが、この第3回入学式での「創造的人間たれ」であると考えます。

3. 講演冒頭に「建学の三精神」を示す

さて、本論に入らせていただきます。まず、講演の先ほどの次の段落を読みたいと思います。「言うまでもなく、創価大学は皆さんの大学であります。同時にそれは、社会から隔離された象牙の塔ではなく、新しい歴史を開く、限りない未来性をはらんだ、人類の希望の塔でなくてはならない。ここに立脚して、人類のために社会の人々のために、無名の庶民の幸福のために何をなすべきか、何をやる事が出来るのかというこの一点に対する思索、努力だけは、永久に忘れてはならない、ということをし残させていただきます」(p.47)と、創立者はあたかも遺言のように語られています。

まず、冒頭の「創価大学は皆さんの大学であります」の「皆さん」とは、一体誰のことなのでしょう。以前、学生の皆さんと勉強会をやったときに色々聞いてみました。皆さんとは誰のことだと思いますかと。本当はここにいらっしゃる皆さんにもお聞きしたいところですが、時間の関係で略しますけれども、ある学生は「やっぱりこれは学生だ」と言いました。またある学生は「いや、学生だけではない。教員も職員も含むんだ」と。「いや、それだけではない、学生の親も含む」「いや、この地域をはじめ、様々な形で創価大学を支えてくださっている方々も含むんだ」「いや、創価大学は世界の平和と幸福のためにつくったんだ、世界中の人々も含むんだ」と、こういう話になりました。私は、全部正解だと思います。創立者は「大学は大学に来られなかった人のためにある」という言いかたをされたこともございます。そういう意味で、創価大学は世界中のすべての人々のための大学でなければならないと思います。しかしまた、大学を建設していく主体者は誰なのかという観点から最も狭く意味をとれば、それは学生であ

る。「学生中心の大学」の意味するところの一つは確かにそこにあると思います。私は教員ですが、もちろん、教員もまた学生に負けず建設の主体者でなければならないのは当然です。こうしてまず、創価大学は単に自分が勉強して、良いところに就職するための手立てのような大学では絶対はないという、この原点と本質を創立者は冒頭に語られているのだと感じます。

次に、その後から「それは同時に、社会から隔離された象牙の塔ではなく…」と続きます。私はこの中に建学の三精神が端的に込められていると思います。まず、一番目の「社会から隔離された象牙の塔ではなく」、これが「人間教育の最高学府たれ」を意味するだろうと思います。この「象牙の塔」という言葉は、19世紀のフランスの批評家のサント＝ブーブという人が、ある詩人の詩、また詩作の態度を評して「象牙の塔」と言ったことから来ているそうです。それは芸術を至上のものとして、ひとり現実の社会から離れて孤高の境地に立つというか、そういう姿勢を批判したときに使った言葉だと言われています。すなわち、学問とか研究が現実の社会から離れていってしまう、そういう有様を「象牙の塔」と評したということになります。ですから、あくまで学問も研究も、また教育も、全て現実の社会で生きている人間のためであると、そういう意味で「人間教育の最高学府たれ」と、まず宣言されているのだと思います。

続いて「新しい歴史を開く、限りない未来性をはらんだ人類の希望の塔でなくてはならない」、こここのところが「新しき大文化建設の揺籃たれ」になると思います。この点は、今日のテーマということになりますので、この後話をさせていただきます。そして「ここに立脚して、人類のために社会の人々のために、無名の庶民の幸福の為に、何をなすべきか、何をすることができるとかというこの一点に対する思索、努力」、これが「人類の平和を守るフォートレスたれ」にあたるだろうと思います。この第3回入学式の講演は、こうして冒頭に建学の精神を示し、そして、これから見ていきますように、その中でも2番目の「新しき大文化建設の揺籃たれ」、これを柱に展開されたものだと思います。創価大学で、これまで創立者が数多く講演をされましたけれども、その中でも特別の位置を持つ講演だと思っています。また、第4回入学式講演「創造的生命的開花を」とともに、特別の意味を持つ講演だと私は思っております。なお、私の理解、読み方では、第4回入学式講演のほうは「人間教育の最高学府たれ」と「人類の平和を守るフォートレスたれ」の2つにお話の重点をシフトさせながら、その上で「創造的人間」についてもう一度「創造的生命的」という観点からお話されている、そういう内容だと思います。

4. 文化の淵源に大学があったことを示す

さて、お話を戻しまして、講演はその後「そこできょうは、まず第一に、私は、大学というものが、社会にいかなる影響を与えるかを、しばらく歴史的に論じさせていただきます」(p. 47)という展開になります。創立者は、創価大学建学の精神、なかんずく「新しき大文化建設の揺籃たれ」の趣旨を明らかにするために、大学と学問、あるいは大学と文化、あるいは学問と文化、これらがどういう関係にあるのかを世界史の中に探るという作業をまずされています。そして、それらの関係を示す例として、3つ挙げられています。

1点目はまず「ルネッサンス」ですね。これは、みなさんよくご存知の、西洋で14、15、16世紀くらいだと思いますが、イタリアを中心に起こった文芸の大復興運動で、学問、芸術、文化が非常に大きな盛り上がりを見せたものです。このルネッサンスが一体どうやって起こったのか、その分析をされています。時間の関係で結論部分だけのお話にいたしますが、ここで創立者はこのように述べています。「このルネッサンスはどのようにして起こったのか。(中略)その前段階として、より深い地盤からの胎動が、それよりもいち早く起こったことに気づくべきで

あります。それは学問の大復興であります。(中略)心ある歴史家達は、この学問におけるルネッサンスを『12世紀のルネッサンス』と呼んでおります。大学が発生したのは、実に、この12世紀におけるルネッサンスにおいてであります」(pp. 48-49)と。

歴史の見方は色々あると思います。歴史を動かす主な力は現象世界の実在的な力、特に物質的な力だと見る唯物論的な歴史の見方もありますし、現象世界の奥にあるアイデア(理念)、あるいは人間の精神、心だという観念論的な見方もあると思います。また、人間の社会を様々な領域に分けて、政治というもののが基本的に大きな力だと見れば政治史観ということになりますし、いや文化だ、あるいは文明だとすれば、それぞれ文化史観・文明史観、あるいはまた社会経済的な力だと見れば社会・経済史観ということになります。このように色々あると思いますが、創立者は、この講演の今読んだ箇所少し前のところで、見出しに「歴史を動かす要因は生命力の潮流」とありますように、「生命力」という言葉を使っています。「生命力」とはどういう意味内容なのか。生命の物質的側面と観念的側面の両方の力を含んだ言葉のように思えますが、ともかく、歴史を動かす力を「生命力の潮流」とされた上で、ここではある種の文化史観、あるいは学問史観を展開されているといいと思います。もっとつき詰めて言いますと、「大学史観」と言っていていいかと思えます。すなわち、ひとつの文化が起こるにはその淵源に学問の大興隆がある、さらにもっと突き詰めて言うと一個の大学が淵源にある、そこから社会の様々な側面の歴史的展開が起こる、こういう歴史の見方をここで示されていると思います。即ち、西洋の歴史に輝くこのルネッサンス、この文化の大興隆が、実は12世紀の大学の発生というところに淵源があると、こういうお話です。

例えば、イタリアには世界最古といわれるボローニャ大学がございます。ご存知のように、創価大学と留学生の交換などをして交流しています。また、フランスにはパリ大学、そしてその後イギリスにはオックスフォード大学、ケンブリッジ大学ができました。ボローニャ大学は、はじめ学生の共同体だったようです。これは本で読んだのですが、学問をしたい、学問を追求したいと、そういういわば学生の共同体としてボローニャ大学はできたようです。そこに、教える人、教師が合わさって、学生中心型のギルドとしてでき上がったのがボローニャ大学だそうです。それからパリ大学のほうは、逆で、教師の共同体だったようです。そこに教わりたい、学びたいという学生が加わってきて、そういう形ででき上がったのがパリ大学ようです。オックスフォード大学やケンブリッジ大学はこのような大学にいわばならってといいですか、そのような理念でできてきたようです。大学の起源や歴史は大変複雑で、学生と教師の共同体といってもイメージとしてなかなか捉えきれない面がありますが、創立者は次のように述べています。「大学とは本来、建物、制度から出発したのではなく、人間的結び付きから発生したものであると、私は考えるのであります。」(p. 50)そして「大学を意味するユニバーシティーの語源はユニベルシタスで、元来、ギルド(組合)と同義で、多数の人々、または多数の人々の結合を意味するもの」(p. 50)と紹介されています。こうしてまず、最初の例として「ルネッサンス」という文化の興隆のその淵源をたどると、ボローニャやパリといった一個の大学に帰着する、とこういう歴史の見方を示されています。

続いて、2つ目の例として、創立者は、古代インドのナーランダ仏教大学の話をされています。「有名なインドのナーランダには、その起源を千数百年前にさかのぼることができる極めて古い歴史をもつ大学がありました」(p. 53)とまず述べ、「規模の大きさでは現在の大学をしのぐほどのものであり、ヨーロッパの大学に比べて、はるかに以前から、整備された大学として、インド、更には東洋全域にわたる精神的淵源地となっていたのであります。中国などからも留

学生がたくさんきていたことが知られております」(p. 53)として、玄奘も訪ねたことなどを紹介されています。そして、「この大学を源流として、東洋の精神文化、特に、インドから中国、日本へと渡った仏教文化の偉大な潮流をたどることが出来るのであります」(p. 53)と語り、その後で「世界に誇る東洋の精神文化の淵源がここにあるのであると、私は確信せざるを得ないのであります」(p. 53)と結論されています。すなわち、世界に誇る東洋の精神文化、それについてはここで語ることは出来ませんが、とりわけ仏教文化についていえば、その淵源を見ると、ナーランダの仏教大学という一つの大学に帰着するのだと、こういう歴史の見方を創立者は示しています。これが2番目の例です。

続いて第3の例として、今度は、ルネッサンスも含めて西洋の文化全体の淵源はどこだろうか、というお話がされています。そして、それがプラトンが創立した、古代ギリシアのアカデメイアという学校(大学)であるということです。池田講堂の前庭に「アカデメイアの噴水」というのがありますけれども、ここから採っています。また、このアカデメイアというのは、「アカデミズム」とか「アカデミー」とかの言葉の語源になっていることもよく知られています。時間の関係で、この第3の例についても講演の結論だけを紹介しますが、「プラトンの学校がヨーロッパの歴史のいたるところに影響を与えたことは、後年、ルネッサンスがおこったときも、その目指したものが“ギリシャに還る”ことであったことから分かります」(p. 57)と創立者は述べ、「プラトンのアカデメイアは紀元前四百年ごろ創設され、以後、ローマ皇帝によって閉鎖されるまで約九百年間、ヨーロッパの精神的源流となっております」(p. 56)と見えています。すなわち、ヨーロッパ全体のその文化の淵源をたずねてみると、プラトンのアカデメイアという一つの大学に帰着する、こういう歴史の見方を示されているわけです。もちろん歴史はそんな単純なものではないということは創立者は百も承知でおっしゃっているわけですが、やはり、学問の重要性、またそこでの大学の重要性を非常に象徴的に強調されて、このように洞察されているのだらうと考えます。

5. 現代文化への危機認識

さて、このようにして一つの大学を源流として花開いた東洋の文化と西洋の文化のその後の姿が現在あるわけですが、これらの文化が本当に人間性を実現し、人々に幸福をもたらす文化であったとすれば、私は、創立者はわざわざ創価大学を創ることはされなかったのではないかと考えます。2度の世界大戦をはじめ、数多くの野蛮と不幸に西洋も東洋も見舞われてきました。現代文化、あるいは現代文明と言ったほうがいいかも知れませんが、ここにはやはり重大な、本質的な問題性があるという現状認識が創立者にあったからこそ創価大学を創立された、このように私は考えます。

創立者の現代文明に対する現状認識は以下の部分に端的に表現されています。「ともあれ、現代文明はある意味において、まさに転換点に立っているといっても過言ではありません。それは、人類が果たして生き延びることが出来るかどうかという、重大な問題提起もはらんでおります。戦争兵器が持つ平和への脅威はもちろん、進歩に対する誤った信仰が、人類の死への行進を後押ししている現代であります。(中略)こうした現代にあつてこそ、再び新たな人間復興が必要であると、私は叫びたい。それは人間中心主義、人間万能主義のそれではなく、人間が他のあらゆる生物の仲間として、いかにすれば調和ある生を持つことが出来るかという意味での人間復興であり、人間が機械の手足となるのではなく、機械を再び人間の手足とするには、どうすればいいかという意味での人間復興であります」(p. 64)と。すなわち、現代の文化、こ

れには大いに問題があるどころか、根本的な問題をはらんでいるというのです。それは、人類が本当にこのまま生きのびていくことができるのかという問いかけを我々は受けているという認識です。

私たちが生きているこの現代あるいは近代の文化、文明に対する批判、これは様々な学者、科学者や哲学者などが、いろいろな形で展開しています。そのすべてについて語ることは当然できませんし、能力的にももちろん不可能です。ここでは、代表的なものとして、フランクフルト学派の主張を簡単に紹介しておきたいと思います。今世紀のはじめ、1920年代くらいからでしょうか、ドイツのフランクフルト大学に「社会研究所」を作って、そこを中心に活動した何人かの哲学者・社会科学者のグループがございます。M. ホルクハイマー、Th. アドルノ、E. フロム、H. マルクーゼ、あるいはもうちょっと後になって J. ハーバーマスといった研究者たちが、マルクス主義ですとかフロイトの精神分析学の遺産を受け継ぎながら、独自の批判理論を展開しました。彼らは、近代の文明、文化、直接的には当代における学問のありようを批判したんですけれども、その批判をするときにいろいろな言葉を使いまして、その中に「道具的理性」という言葉がありました。人間の理性が道具になりさがってしまった、ということなんです。

本来、人間の理性というのは、ただ単に論理的にものを考えとか、概念的に考えるということだけじゃなくて、何が正しくて何が正しくないのかということを中心にきちんと道徳的に判断する、その能力を含んでいるとっていいと思います。このような理性が、ヨーロッパを中心に啓蒙思想家と呼ばれる思想家たちによって人間の最も価値ある特質とされ、理性を覆っている本能的なものや迷信や宗教、そういう理性を覆っているものをだんだん取り除いて理性が全面的に開花していけば人間は幸せになるのだとされたわけです。しかし、その啓蒙思想家たちが主張するように実際のヨーロッパ社会はそうなったのかというと、フランクフルト学派の人たちはならなかったと見るわけです。理性を開発すれば人間が幸せになると信じて突き進んできたけれども、その行き着く先は第一次世界大戦そしてファシズムの登場さらに第二次大戦という最悪の野蛮であった。なぜ、そんなことになってしまったんだろう。それは、人間の理性が道具的なもの、単に手段的なもの、技術的なものになったからだということを、特にホルクハイマーたちは「道具的理性」という言葉を使って主張しました。

この理性が道具になり下がったというのは、現代の例を挙げるなら多分こういうことだろうと思います。「地下鉄サリン事件」という悲しく残酷な事件がありましたけれども、サリンを作って人間を殺すということが良いことなのか悪いことなのか、こんなことすら判断できない、たぶん多少は判断できていた部分もあったんだと思いますけれども、教祖なる人物の力に屈して作ってしまった。サリンを作った人たちの中には、一流大学といわれるところで学問を修めた人たちが多くいました。事のよし悪しが判断できなくて、ただサリンを作るその手段として、最も効率的で節約的でまた計画的であるためにはどうしたらいいか、このことにだけに知性・理性が向かい奉仕するような、すなわち、ただひたすら目的達成のための手段として、道具として奉仕するようなそういう理性のありようだと言っていいと思います。同じように、原爆がアメリカのある大学で研究が行われて作られ、ナパーム弾などの爆弾もアメリカのある大学を中心に研究されて、その結果としてできあがったということの本で読んだことがあります。「人類の平和を守るフォートレスたれ」ということがいかに困難な課題であるかということの思い知らされます。ファシズムの侵攻をくい止めるためであれ何であれ、原爆を作り出すような知性・理性は知性・理性の名に値しない、まさに道具的なものであらうと思います。

もうひとつ、同じような内容になるんですが、皆さんはジュラシックパークという映画を御覧になったでしょうか。巧みな技術を使って恐竜を現代に蘇えらせて、恐竜のテーマパークを作るという映画です。パークのオーナーがパークの開園に先立って何人かの専門の学者を呼んでパークを見てもらい、そして安全だというお墨付きをもらうために見学会をやるんですが、その最中に、コンピューターのシステムで管理されている恐竜が、システムの故障でみんな逃げ出して、人が喰われ殺されることになり、こんな危険なものにお墨付きなんか出せないということで話が終わります。その中でマルコムと名乗る数学者は、パークを訪れて、最初非常に感動し、驚きます。ところが、すべてをコンピューターで管理するなど、パークのコンセプトに非常に怪しさを感じはじめ、オーナーに対して色々批判的な意見を述べます。まず、「ここに並べ立てられている自然への謙虚さの欠如にはめまいがする！」と痛烈に批判します。すると、オーナーは「我々は誰にもできなかったことを成し遂げたんだぞ！」と反論します。これに対しマルコムは「できるかどうかで心に奪われて、やるべきかどうかは考えなかった」とまた痛烈に批判します。まさに「道具的理性」批判、そういう感じがするところです。この映画には他にも現代文明批判の言葉がいろいろ登場してきて興味深い作品です。

さて、現代文化が本当にそういう危機的な状況にある。一生懸命人間を殺すために勉強する、一生懸命人間を殺すために仕事をするというような、根本的な問題を私達は突きつけられているんだと、そういう危機認識を少ない紙面ではありますが凝縮的に創立者は示されていると思います。

6. 新しき大文化建設の揺籃たれ——創大開学の趣旨

そのように現状を踏まえた上で、いまこそ新しい文化の興隆がぜひとも成し遂げられなければならないというのが創立者の主張だと思います。では、その新しい文化、創立者が言うような、人間が機械の手足になるのではなく、機械を手足とする人間復興の文化を、一体どうやって創り上げていくのか、ということになります。それは、1つの文化が起こるにはその淵源に1個の大学があるという、いま3つの例で示されたのとまさに同じ方程式にしたがって、急がば回れで大変に時間がかかることだけれども、新しい文化を興隆させるためにはその淵源となる1個の大学が必要なんだ、これがこの創立者講演の眼目の1つであると思います。このことは講演の以下の箇所に述べられています。「ここで私は、このネオ・ルネサンスともいべき人間復興への要請に対して、今こそ、その重要な分野として、哲学・思想・学問におけるネオ・ルネサンスを必要とするのではないかと、考えるのであります。学問への新たな意欲を人類が注ぐならば、そして先見の眼を開くならば、人類が生き延びるための新たな哲学、思想が確立されるに違いない。そしてそれは、単に人類が生き延びるためという消極的な目標を超えて、新たな人間讃歌の文明が築かれてゆくことと信じるのであります。この、これからなさねばならない壮大な人類の戦いの一翼を、創価大学が担うならば、そして少なからぬ貢献をなしうるならば、創価大学の開学の趣旨も結実したと、私はみたいと思うのであります」(pp. 64-65)と。

すなわち、繰り返しになりますけれども、新しい文化の創造が必要であるが、それを創価大学という1個の大学を淵源として築いていく、そのために創価大学を創立したということがここで語られています。つまり、これが、「新しき大文化建設の揺籃たれ」という建学の精神の持つ人類史的あるいは世界史的な射程といいますか、広がりだと私は考えます。先ほども言いましたけれども、自分の榮譽栄達のため、あるいは良いところに就職するためとか、ただ単に

知的アクセサリーのように教養を身につけるためとか、そうしたことのために大学を建てたのではない、まさに新しい文化を創造していくその淵源になる大学なんだというのが創立者のここでの主張であります。

そして、このような趣旨に適う大学の、すなわち創価大学の学生は、「創造的人間」であってほしいというのが、この講演のもう1つの眼目、柱ということになります。では、創立者の言う「創造的人間」とは一体どのような人間なのでしょう。これを後半のテーマとして、共に考えていきたいと思えます。

7. 「創造的人間」の要素①——自由と自立

まず、講演の関係する箇所を読んでみたいと思えます。創立者はこう言われています。「そこで、更に私は、こうした大学の本来の使命を認識した上で、皆さん方に次のことを要望したいのであります。それは、『創造的人間であれ』ということであります。わが創価大学の『創価』とは、価値創造ということであります。すなわち、社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元していくというのが、創価大学の本来目指すものでなければならない」(pp. 57-58)と。「価値創造」とおっしゃっていますね。価値は人でも物でもサービスでも、所詮、すべてはそれをめぐると人との関係の中で生ずると思えます。したがって人間を離れて価値はありえないという意味で、価値創造ということは窮まるどころ人間の創造に集約されると考えます。ですからいま引用した文章中の「価値」という言葉を「人間」という言葉に置き換えてもちゃんと読めるだろうと思えます。「わが創価大学の『創価』とは、<人間>創造ということであります。すなわち、社会に必要な<人間>を創造し、健全な<人間>を提供し、あるいは還元していくというのが、創価大学の本来目指すものでなければならない」と、このように読むことができると思えます。そして、その場合の「人間」が「創造的人間」なのだと思えます。

そこで、ここから創造的人間とはどういう人間を言うのだろうかを、あまり創造的でない私が言うのも変ですが、考えてみたいと思えます。いろいろな見方ができると思いますが、私は以下の3点を創造的人間の要素として整理してみました。これ以外の整理の仕方が当然あると思えます。まず1番目に、創造的人間の前提としての「自由と自立」ということ。2番目に、その自由で自立した自分が、自己自身を拡大していくという「自我の拡大」、そして3番目に創造的人間の生命に溢れる「歓喜」、この3点に分けて考察してみたいと思えます。

はじめに、自由と自立ということですが、まず講演を読みます。「創造性を養うには、精神的な土壌が豊潤であることが必要であります。そして、それは精神の自由度という言葉で表されるのではないかと思う。精神が抑圧され、あるいは歪曲されているところに、自由な発想も、独創的な仕事もなされる道理がない。精神が解放され、広い視野を持っているとき、そこには汲めども尽きない豊かな発想が出てくるものであります。」(p. 59)ここでは、精神的な土壌が豊潤であることが必要だ、と言われてます。精神的土壌が豊潤であるとはどういうことだろうと、学生時代に先輩や友人と勉強会をやったときにいろいろと議論しました。そのとき、ある先輩はこういうふうに言いました。「現役創大生が芥川賞を受賞しても全然おかしくないような雰囲気」と。「なるほどな」と思いました。私は、きっとそのうち、そういう学生が出るんじゃないかと思っています。そして、その精神的土壌の豊潤さは「精神の自由度」という言葉で表されると創立者は言われています。では、精神の自由とは何だろう、これもいっぱい議論をし合った問題です。

学生時代、この問題を議論をしていると、やはりその先輩がこんなふうにいいました。「君たちの議論を聞いていると、君たちは不自由ですらない。そう思えてくる」と。不自由ですらない。どういうことだろうと思いました。いま、「精神の自由度」という言葉を単純に用いて上からグレードをつけて並べてみると、自由、不自由、不自由ですらない、とこういうことに多分なりますね。不自由ですらないとはどういうことか、先輩に聞くのもしかたなので自分で考えることにしました。そして自分なり思うところがありました。

いま、学生の皆さんと勉強会をやるときに、端的に「あなたは今自由ですか？と聞かれたらどう答えますか？」と聞くと、だいたい8割がたの学生が「自由だ」と答えます。中には、不自由だと答える人もいます。ついでにもうひとつ、「あなたは自立していますか？」と聞くと、大半の学生が「自立していません」と答えます。ですから、自由と自立はやはり似ているようだけれども、違うことがわかります。そこでまず、自由についてですが、ここで、「自由とは何か」という哲学的な定義をしようとは思いません。それはあまり意味のあることだとは思いません。そうではなくて、実際に「自由」という言葉を使って勉強したり対話したり考えたりする、その中で自由という言葉に自分が込める意味内容が広がり、深まっていく、そのほうが価値的だろうと思います。ですから、自由という言葉をここでも勝手に使いますけれども、この「不自由ですらない」という先輩の指摘は、「自分がどんなに不自由な身であるのか」ということをぜんぜん自覚していない、という意味だと思いました。自分の不自由さを自覚できない、それは、外的な束縛があって不自由なのにそれを感じられないと、単にそういう意味ではなく、自分自身の内的な、あるいは言うてよければ宿命的な不自由さを自覚できない、そう言っているかと思います。

いきなり「宿命」という言葉を使いましたが、普通日常生活の中で宿命という言葉が使われるときにはどっちかという、悪いほうで使いますね。そういう意味で私なりに端的に言わせてもらおうと、人にはいとも簡単にできることがどうも自分にはできない、これが宿命だろうと思っています。私の友達はたくさんの友人を作って友好的に生活しているのに、自分はどうも友達を作るのがへただとか、今朝、隣のおばさんに「おはようございます」と元気いっぱい挨拶しようと思ったけれど、できなかつた狭量な自分とか、あるいは、人は簡単に朝早く起きることができるのに、自分はどうも朝起きられないとか、こういうのも宿命とっていいかと思っています。そして、そういう自分に関して不自由だと感ずるかどうかということだと思っています。

創立者が中学生の質問に答えて、てい談の形で書かれている『希望対話』という本があります。その中で、「もっと自由に生きたい」という中学生の質問に答える際、創立者は「権利としての自由」と「能力としての自由」という言葉を使っています。私たちは「権利としての自由」を手に入れていれば、それで自由だと勘違いしてしまうのではないかと、もっと大切なのは「能力としての自由」である、そういう趣旨であると思います。例えば、英語が自由に話せない、スペイン語が自由に話せない、あるいはあれができない、これができない、そのことをなんて自分は不自由なんだとどこまで自覚できるか、こういうことだと思っています。そして、その不自由さを自覚したときに初めて自由への道が、より自由への道が開かれるのだと思うのです。創造的人間であるためには自由でなければならないと創立者は言われていますが、まずはその大前提として、自らの不自由さをいかに深く自覚して、自由への道を目指していけるか、これがカギだと思っています。

次に「自立」の問題です。こちらはまず第4回入学式講演の抜粋を読みます。「知恵」とは、人間主体に根ざしたものであり、ソクラテスがいみじくも喝破したごとく『汝自身を知る』こ

とから発するのであります。(中略) 真実の学問とは、詮ずるところ、この自己への“知”にある。創価大学が目指す学問、教育の理念も、ここにあるといってよい。」(p.98) また、他の講演では『諸君は、わたしから哲学を学ぶのではなくて、哲学することを学ぶでしょう。思想を、単に口真似するために学ぶのではなくて、考えることを学ぶでしょう』自ら考え、自ら真理を探究することを学べ！—カントのこのメッセージは、そのまま創価教育に通ずる。』(『自分で考える』創造的知性を「『創立者の語らいIV』1995年、p.205)

自分というものを知れというテーマですね。これはやっぱり本当に他に依存してはできないことだと思います。自立していて、初めてできる作業だと思います。では自立とはどういうことだろうか、これも難しい問題です。学生の皆さんに聞きますと、大体自分は自立していないと答えます。どうして自立していないのかと聞くと、やっぱり親のすねをかじっているというのがあるんですね。それで「いつになったら自立するのか」と聞きますと、「社会に出て自分で稼ぐようになったら自立する」と。これは経済的な自立ですね。しかし、ここではもちろん、いわば精神的な自立が問題になっていると思います。この問題も大変に難しく、またいろいろな言い方ができると思いますけれども、フランクフルト学派のひとりであったエーリッヒ・フロムは『自由からの逃走』という本の中で、大体次のようなことを言っています。この本はナチズムがなぜ起こったかについての分析の本なのですが、簡単に言いますと、ナチズムは、ヒトラーのような人たちにみんな騙されて、気がついたら支配されていたと、そういうことでは全然ないと言うのです。そうではなくて、多くの人々は、自由をもてあまして自由から逃げたと、自由を獲得するそれと同じ熱心さで自由から逃げたのだと分析するのです。

実は、自由というのは非常にいいものですが、一方で非常に不安とか孤独、孤立をもたらすとフロムは言います。そして、例えば他人に暴力を振るう人間、ヒトラーのような人は、自分が暴力を振るう相手、自分が支配する相手に寄りかかって生きている、そういう点で自立していないんだと言うのです。最近、ドメスティックバイオレンスとって、自分の奥さんに散々暴力を振るうような夫が問題になっていますけれども、こういう人も、暴力を振るう相手に依存して、この相手がいないと生きていけない、こういう依存的なタイプなんだということになるわけです。他人を支配しないと生きていけない、こういう依存のタイプないしは側面もある。逆に、他人に支配されることで依存する、そういうタイプ、側面もあるとフロムは言うのです。

さて、時間の関係で結論的に述べますが、私の考える自立した人間とは、「自分の仕事を持っている人間」、これが自立した人間のイメージです。さきほど、自由は不安で、孤独、孤立、耐え難いものでもあると紹介しましたが、例えば私たちは手帳を持っていますが、その手帳にスケジュールがいっぱい書き留めてある。今日はクラブとか、今日はバイトとか、今日はこういう仕事とか今日はこういう会合とか、今日はこういう用事とか、いっぱい書いてあると思います。時々何も書き込まれていない日があります。これはフリー、自由なんです。この時、ちゃんと自分のやる仕事が決まっていますかという問題ですね。なんの義務もないと、今日はどうしようと迷ってしまうタイプは、自分の仕事を持ってない、自立してない人間だということができると思います。自分にもそういうところがまだかなりございます。そういう時、困ってしまうんですね。今日一日どう過ごそうかというふうに、自分の仕事がないから困ってしまうんです。ちょっと部屋でものぞいてみようかな、ちょっとブラブラしてみようかな、誰か仕事を与えてくれないかな、というふうに、暇つぶし、時間つぶしをして、せっかく手に入れた自由を使いきれずに捨て去ってしまうということになります。こういうタイプは、他人から

何かをするよう命じられないと生きていけない、そういう依存的なタイプだと言っているかと思えます。この点で思い出すのは、今から31年前のトインビー博士と創立者との対談です。トインビー博士に対して創立者は「博士の座右の銘は何ですか」とたずねたとき、博士は「さあ、仕事を続けよう」と答えたというのです。自立している人間なのだと私は思いました。仕事を始めようではなくて、続けようなんですね。すでに仕事を持っていて、それを続けていくという、そういうことをトインビー博士は言っていると思います。

この自由と自立ですね。まず不自由さを自覚する。そして、その上で、自分の仕事を追及する。フロムは「真の自由」は、この仕事ともうひとつ愛を通じて成し遂げられると言っていますが、できればその仕事が愛に貫かれていけばさらにいいのだと思います。

8. 「創造的人間」の要素②——自我の拡大

次に、自我の拡大、自分自身の拡大、ということが創造的人間の要素としてあると考えます。「勝手に考え、自由に振舞うのが精神の自由ということではない。発想し、対話し、研磨しあうことによって、自らの視野を拡大し、より広い、より高い視点に立って物事を洞察していくことこそ、精神の自由を真に拡大する道ではなかるうか」(p. 59)と講演にはあります。この1行目の「発想し、対話し、研磨しあう」、この順番が大切だと私は思っています。先ほど引用した別の講演にも『自分で考える』創造的知性を」という題目がつけられています。まず「私はこう思う」と自分の考えを持ち、次に、それを他の人と対話によってぶつけ合って、その自分の考えに必ずしもこだわらずにいろいろな人たちの考え方も受け入れて、それを研磨し合う、磨いていく、深めていくという、こういう作業が必要だと。そのことによって自分自身もだんだん視野を拡大していける、こう創立者は言われています。

あるいはまた、第4回入学式の講演では、「私の胸にあふれてやまぬ“創造”という言葉の実感とは、自己の全存在をかけて、悔いなき仕事を続けたときの自己拡大の生命の勝どきであり、汗と涙の結晶作業以外の何物でもありません」(p. 100)と語り、悔いなき「仕事」と「自己拡大」について話されています。その他、第4回入学式講演をはじめいたるところに、「逆境への挑戦」「邪悪に挑戦する意志力」「全一なるものとの結合」などの表現で、創造とは自分自身を拡大していく作業であるという内容の話が出てまいります。その中に、「では精神の自由度を増し、自己を拡大させていくエネルギーをどこに見出すか。この点にくると、どうしてもまた『人間とは何か』という問題になり、人間学に戻ってこなければならぬ。人間の持つ潜在的な可能性を引き出し、開発し、アウフヘーベンさせる哲学の問題となってきたまう」(p. 60)と書かれている箇所がございます。ご存知のように、創立者の、この創価の哲学の基盤は大乗仏教、なかでも法華経を中心とする大乗仏教の中にあります。その大乗仏教の真髄と言われる教理に「一念三千」があります。ごく簡単に言えば、自分自身の生命、自分自身の自我が、世界大、宇宙大に広がる、そういう広がりを持つのだとする原理と言っているかと思えます。

では、自分自身が世界大、宇宙大になるとはどういうことだろうか、と私はずうっと考えてきました。実際に自分の自我が宇宙大じゃないもんですから、そういうことを頭で考えていたわけです。そんなある時、「あー、こういうことか」と、少しわかったような気がした出来事がありました。一つは創価学会の会合でのエピソードです。ある研修会が開かれて、私もその一員として参加させてもらい、創立者と一緒に勤行をさせていただく機会がございました。勤行が終わってすぐ、創立者はマイクを取ってこのように言われました。「今日、諸君がこの会館にやってくる途中、道の両側にきれいな花が植えてあったでしょう。あの花は地元の婦人の方々

が真心込めて植えてくださった花である。私は今その方々、またご家族の健康と幸福、ご長寿を御祈念させていただきました」と。私はそれを聞いて、びっくりしたといいますか、衝撃を受けました。一緒に参加した友人に、「君は、花が目に入ったか」と聞くと、「目に入らなかった」と彼は言いました。私はそのときは花が目に入りました。そして、きれいだなと思いました。皆さん、普通はそこまでですよ。しかし、創立者は花を見た瞬間に花を植えてくれた人のことが心に浮かび、さらにその家族のことが浮かび、その人の健康と幸福と長寿を祈る、そして祈るだけではなくて、具体的にいろいろな形で激励をする、そこまでやられるわけです。花を見たその時に植えてくれた人のことを思う、そうでないと後で祈るなんてことは絶対にできないと思います。

すなわち私たちは、花なら花という自分の外の世界にあるものと、目や鼻などの感覚器官を通して関係するわけですが、まず花の存在に気がつかない、すなわち自我の中に入り込まない人、次に、きれいだなぐらいに入る人、そして花だけでなくその花の背後に植えてくれた人、またその家族のことまで入る人がいるわけです。一体、自我の大きさ、広がりという言い方をすると、どの人が一番大きいでしょうか。もちろん3番目の人ということになると思います。

次に別のエピソードですが、同じような例になります。これは、ある先輩から聞いたお話です。創価学会には『聖教新聞』という機関紙がありますが、今から10数年前のことで、この新聞を世界中のたくさんの人に読んでもらおうと創立者が言われて、その年の10月と11月の2ヶ月間、創価学会では『聖教新聞』購読拡大の活動を大々的に展開しました。まず1ヶ月のキャンペーンが終わり、増部になった分がいよいよ翌日から配達されるという10月31日の夜から翌日の未明にかけて、雨が降り、時ならぬ雷もなったようです。創立者はその時、その雨や雷の音に夜中眼を覚まされて、そして朝までずっと起きていらっしやっただけです。なぜ起きてらっしやっただけのかというと、自分が頑張ろうと言って、その結果会員の皆が頑張り、何十万部と新聞が増部になったが、その分は、一軒一軒配って歩く新聞配達員さんに重くのしかかることになる、それなのにこの悪天候で本当に無事に配り終えることができるだろうか心配でならなかったというのです。しかし全国の配達状況を知るわけにはいきませんので、せめて創立者がお住まいの地域だけでも、配達員さんが無事だったかどうか報告を入れてもらうように頼み、そして最後の配達員さんが無事終わりましたという報告が入るまで、ずっと起きてらっしやっただけというのです。そう伺いました。私はその当日、雨が降ったことも雷が鳴ったこともまったく気づくことなく、きっと大いびきをかいて眠っていました。雨という外の世界にあるものが、私の自我の中にぜんぜん入り込まなかったわけです。私にその話をしてくれた先輩は、雷の音に気がついて、うるさいなあ、はやく止まないかなと思ったそうです。雨や雷がそのような形で自我に入り込んだわけです。そして、創立者の場合、雨や雷を通じて新聞配達員さんの安否の問題が自我に入り込んでいるわけです。

自分の自我が拡大して、それが世界大、宇宙大になっていくということは、具体的にはいま述べたようなことではないのかと思うのです。すなわち、世界のすべての出来事といいますか、様々な出来事が、自分の問題として自分の中に入ってくる、自分と無関係でなくなる、あるいは世界を自分の関心の対象にする、誰人をも自分にとって無関係な第三者にしない、それが自我の拡大ということなのではないかと思います。今日、たまたま『聖教新聞』を見ましたら、第1面に6月から創立者の地球紀行「わがふるさと世界」というシリーズが連載されるとありました。「わがふるさと世界」——まさにこの言葉ですね。同じようなことをルネッサンスの詩人ダンテも言ったそうですけれども、まさに、自分の自我の中に世界を収めて呼吸すると

どうか、そういう巨大な自我、人格だけが発することのできる言葉なのだろうと思いました。

あわせて、この「自我の拡大」という観点から、創立者が別の講演で、『創価教育』の理想の火を点された牧口先生と戸田先生。一切の淵源はお二人の師弟の絆にある」（「偉大な創造は魂の絆から」『創立者の語らいⅢ』1995年、pp. 88-89）と、「師弟」というテーマに言及されている点について一言だけ話をさせていただきます。もちろん私には師弟について語る資格はまったくありませんし、この重大なテーマは論ずるより実践あるのみであります。ただ、自我の拡大の観点から、その基本的な関係性、方向性だけを確認したいと思うのです。

さきほど地下鉄サリン事件の例を出したのですが、犯人たちの間にもひとつの師弟の関係があったと思います。しかし、あそこにあるのは、自我の拡大という観点をまったく欠いた、むしろそれとまったく逆の事実であります。あまり大きくない師匠の自我に対して、他方に弟子たちの自我もあるのですが、この自我は自分の考え・思想を捨てて自我をゼロにまで縮小して、ひたすら師匠の言うとおりにする、いわば自我のないロボットになるという支配—服従の形式だけがそこに存在しています。自分の自我をゼロにすれば、小さな師匠の自我も無限大に大きくなって、弟子はその自我に飲み込まれてしまいます。創価の「師弟の絆」とはこのような関係ではまったくないはず。いま、「創造的人間」との関連で話をさせていただくと、私は、自分自身の自我をどこまでも拡大していくという方向の中に本当の師弟があるのだと思います。牧口先生と戸田先生、そして池田先生における師弟関係では、創造的人間が持つ、まさに世界を呼吸する巨大な自我と自我が交わっているように思われるのです。そして2つの自我が無限大にまで拡大すれば両者は完全に重なり合うことになります。これを仏教では「不二」と表現されているように思われます。私たちも、このような師弟の人生を歩みたいものと思います。自分の自我をともかく拡大して、自分の中に世界を呼吸するような人間になっていく、その方向の中に私たちの目指すべき師弟の道があると思った次第です。

9. 「創造的人間」の要素③——歓喜

最後に歓喜ということですが、これについては特に第4回入学式講演「創造的生命的開花を」をはじめ、いろいろな講演や著作の中で創立者は論じられています。第4回入学式講演については、連続講演会の次のテーマでありますし、またきょうは時間の関係もあり、さらに私自身「歓喜」というテーマについては思索中でもありますので、ここでは「自我の拡大」との関係で一言触れるに留めさせていただきます。創造的生命には歓喜が溢れてくるという趣旨のことを創立者は言われております。また、「生」を創造する歓喜を知らぬ人生ほど、寂しくはかないものはない」（p. 100）とも語っています。これらの言葉は、若き日にベルクソンをはじめ様々な哲学者の思想を学ばれた創立者が、それらを自身の大きな人格の中で溶融させ、独自の思想性と表現として発せられたものという印象を受ける言葉です。

さて、私たちは自分の自我が拡大したとき、あるいはそう感じたとき歓喜・感動を覚えるようです。いままでにないすばらしい体験をしたときなどです。逆に自我が縮小するとき、苦しみや落ち込みを感じますね。これは経験的にそうです。すなわち、自分の自我が拡大し、創造的人間の方向に歩みを進めているかどうかの指標は、自分自身のなかに歓喜が脈打っているかどうかということにもなると思います。もちろん自我の拡大に向かって前進していても、あるいは、だからこそ苦しい時もあると思います。創立者は、「逆境への挑戦」を自我の拡大の必須条件として示されてもいます。しかし、「創造的生命的開花を」の中で、創立者は、創造的生命的の持ち主、すなわち創造的人間の具体像と思われるその姿を見事に表現されていますが、その

人間像の全体的なトーンを「歓喜」をキーワードとして表現されています。いま、その部分の全文を示しますと、「新たなる“生”を創り出す激闘のなかにこそ、初めて理性を導く輝ける英知も、宇宙まで貫き通す直観智の光も、襲いくる邪悪に挑戦する強靱な正義と意志力も、悩める者の痛みを引き受ける限りない心情も、そして宇宙本源の生命から湧き出す慈愛のエネルギーと融和して人々の生命を歓喜のリズムに染めなしつつ、脈打ってやまないものがあるからです」(p.101)という箇所であります。この創造的人間の具体像こそ創立者自身の人格そのもののように思えてなりません。ともあれ、共にこの歓喜の人生、歓喜の人間を目指していきたいと思います。また、そのためにも、同じ価値のあることをやるなら、歓喜してやるのが実践的にはとても大切だと思います。「呼び水」という現象がありますように、姿勢・決意としての歓喜が結果としての歓喜をもたらすと信じて前進していきたいと思います。

最後に、「創造的生命的開花を」では「現代から未来にかけて“創造的生命的”の持ち主こそが、歴史の流れの先端に立つことは疑いない、と私は思う。この“創造的生命的”の開花を、私はヒューマン・レボリューション、すなわち『人間革命』と呼びたい。これこそ諸君の今日の、そして生涯かけての課題なのであります」(p.101)と、このように創立者は言われています。自我の拡大をテーマにお話ししてきましたが、では自我の拡大はどうしたらできるのか。これは、結論的には、拡大しようという努力に尽きると 생각합니다。たとえば、さきほど花の話をしました。花を1回も育てたことがない人が、育てた人のことをどこまで思えるだろうかと思います。ですからやはり、ひとつはいろんなこと体験することだと思います。しかし、私たちはすべてを体験することは当然できません。その体験できない分は、イメージーション、想像力で補っていくしかないと思います。ともあれ、花にせよ何にせよ、人間がすばらしいと思うもの、これが価値あるものと言えますが、それを創造することが「創価」。そして、この「創価」を大いに学ぶ、学び合っていくのが「創価大学」であり、それが創造的人間への道になるのだと思います。

少々時間を超過しましたが、今日は以上で終わらせていただきます。ご静聴大変にありがとうございました。

(本稿は、2003年5月16日の講演に加筆し、訂正したものです。なお、創立者講演からの引用文のページは、創価大学学生自治会編『創立者の語らいⅠ』1995年によっています。)